

**私の父は
ノーノーボーイだった**
日系人強制収容に抵抗した父の足跡

川手 晴雄

■目次

はじめに.....	6
第1章 父の思い出.....	13
日系アメリカ人2世の父はどういう人だったのか.....	13
第2章 日系アメリカ人の歴史.....	35
1. 最初の海外移民（幕末～明治中期）.....	35
2. 海外移民の増加（明治中期～大正）.....	37
3. 日本人社会の形成（大正末期から昭和初期）.....	42
第3章 太平洋戦争と日系人の強制収容.....	47
1. 真珠湾攻撃と日系人.....	47
2. 日系人強制収容所とその生活.....	50
3. 「忠誠登録」と「ノーノーボーイ」.....	56
4. 報国青年団と市民権放棄運動.....	58
第4章 父の手がかりを求めて.....	63
1. ツールレイクへの道.....	63
第5章 父の日記を探る.....	89
第6章 人を訪ねる.....	141
(1) ミス・タナカ.....	141
(2) ライアン・ヨコタとの再会.....	147
(3) アート・ノムラ.....	155
(4) デイ・多佳子さん.....	163
第7章 ロスアンゼルス日系人博物館訪問.....	173
1. ロスアンゼルス紀行.....	173
2. 高岡文子さんインタビュー.....	185
3. アメリカの教え子たち.....	189

第8章 Ken Kentaro Takatsui のインタビュー記録を探る	193
第9章 ツールレイク再訪.....	211
1. フランシス浅原	212
2. ミス・タナカ	217
3. アルバート・ヨシカワ	220
4. ビル・西村	222
第10章 戦後の父の足跡を追う	227
1. 市民権回復運動	227
2. 日本に帰ったノーノーボーイたちのその後を追う	235
エピローグ.....	247
参考資料	260

はじめに

第2次世界大戦中に、アメリカ合衆国西海岸地域に居住していた、在米日系アメリカ人の人々、約11万人が強制的に居住地から退去させられて、大陸内部の砂漠の不毛地帯に建設された「収容所」に収容されていたことは、かなり知られていることである。

このことは、日本でもいくつかの小説が書かれ、テレビドラマにもなった。しかし、それは遠く離れた太平洋の向こう側で60年以上も前に起こったことであり、日本人の関心は、これまでもあまり盛り上がったことはなかった。私自身についてもそうであった。

私の場合は、他の日本人とは少し違い、私の父が、実は日系2世であり、大戦中にこの収容所に入れられており、戦後に日本に帰国(?)した人であった。それにもかかわらず、私自身は、「父がアメリカ生まれの日系2世である」「強制収容所に入れられていたらしい」ということぐらいしか知らなかったし、関心もなかった。

なぜなら、父はそのことについてあまり話さなかったし、私自身、多感な少年時代から、父に対して男の子にありがちな“反抗心”と“対抗心”を持ち続けていて、父の人生について関心などなかったからである。父がアメリカについて語ったことと言えば、「アメリカは自由の国なんだ」と何度も何度も年少時から聞かされたことや、その広大な大地や自然のこと、珍しいアメリカ製のお菓子や果物、ケーキ、パイなどをわざわざ、外国食料品専門店から買ってきて、「アメリカ人はこういうものを食べているんだ」と話し、食べさせてくれたことぐらいであった。ただし、父の数奇な人生に興味を持ち始めると、それまで気がつかなかった、様々な父の「アメリカ人気質」が思い出されるようになったが(後述する)。

そんな私が、「父の人生」に興味を持ち、同時に「日系アメリカ人の強制収容」に興味を持ち、調査するようになったのは、父の死とその後に出てきた、父の残した手記や資料、写真に接したからである。

はじめに

父が残したアメリカから持ち帰った「古い革の鞆」が押し入れの奥に押し込んであった。父の死とともに、父の残した遺産とその相続、相続税の納入（父の郷里であった広島には、父の名義の農地がかなりあった。）のためには、父とその先祖の戸籍調査が必要であった。古い鞆の中にもそれに関わる物があるかもしれない。そして、その中にはかなりの分量の書類や手記があったのである。

それは、英語で書かれた物であったり、日本語で書かれた物であり、多くは英語であった。英語で書かれた物は、すばらしい筆記体であるために、日本人である私には、一文字一文字の判別もつかない物であった。日本語の方も、すばらしく達筆で、読むのが大変であったが、それが、収容所時代の日記であることは分かった。

「ツールレイク収容所」……これが、父が収容されていた収容所の名前であった。このときは、私はまだ、「ツールレイク収容所」がどんな所かについて、全く知らなかった。ただ、この手記は重要な歴史的資料であるということだけは認識したのである。そして、この手記と資料を無駄にしないためにも、父のことを調べなければと思い始めたのである。

ただし、その思いが実際に行動に移るようになるためにはそれからかなりの年月がかかった。日々の多忙な仕事と家庭生活で、あつという間に年月が経ってしまったのである。しかし、運命的な出会いから、私は父の人生を探る旅を始めることになった。

父が死んで、7年がたった2004年の夏、私は仙台にいた。家族との東北旅行の途中で、仙台の七夕まつりに立ち寄ったのである。そして、昼食で、ある「ラーメン屋」に入り、注文したラーメンを待っていたときであった。妻がおいてあった地方紙に目を通して、ある写真展の案内に気付いたのである。それは、ある仙台出身の写真家の写真展の案内だった。

「21世紀への帰還Ⅳ」……収容所に閉じこめられた人々……

というのがその写真展の名前であった。「あなた、これお父さんに関係あるんじゃないの」と妻が私に言い、私はすぐに、連絡先

に電話をかけて、写真展会場を訪れたのである。それが私と写真家「宍戸清孝氏」との運命的な出会いとなったのである。第2次世界大戦中に強制収容所に収容された日系アメリカ人の人々の証言と写真を撮り続けている宍戸清孝氏は、私に、この「歴史的事件」についての基本的な知識を与えてくれた人である。

初対面の私に対して、氏はとても親切に、そして自身も興味深く話を聞き、質問に答えてくれたのである。私が、父のことを話し、収容所にいたことを話すと、「どこの収容所にいたのですか」と彼は聞き、私が、「確かツールレイクとか云うところですよ」と答えると、彼はそれまで以上に興味深そうに「それは大変なところにいましたね」と言い、そして、「ノーノーボーイ」を知ってますかと言った。「ノーノーボーイ」……この言葉を私はそれまで全く知らなかった……知らないと言えると、「ノーノーボーイとは、収容所に入れられた日系アメリカ人に対して、アメリカ政府が行ったアメリカ政府に対する「忠誠登録書」の記載に対して「NO」つまり、アメリカに忠誠を誓わなかった人々のことですよ。こういう人は、アメリカ政府にとっては最も扱いにくい問題児になりまして、そこで、そういう問題人物だけを各収容所から集めて隔離するために作ったのが、ツールレイク収容所なんです。つまり、あなたのお父さんは、「NO」と書いた問題人物だったのです。何かそれらしきことを言ってませんでしたか」

それを聞くと、私も父が言っていたことを少し思い出した。「収容所で独房に入れられたことがある」「FBIがきて、連れて行かれた」「仲間と反対運動をした」こんなことを言っていたことを思い出したのである。しかし、その記憶はそれまでで、父が「なぜそんなことになったのか」「その後どうなったのか」について話した記憶はなかったし、私が聞いた記憶もなかった。しかし、氏の話聞き、にわかはこの記憶が、一つの形をなしてきたのである。「父は、アメリカ政府の強制収容に反対して、問題を起こしたらしい」「問題人物であつたらしい」「だからかもしれないが、話したがらなかつ

たのかもしれない」……少しづつ、父のことが形を持ってきたのである。

「そうなんですよ。ノーノーボーイの人たちはほとんど、自分のことを話さないのですよ。そして、話さないまま死んでいっているのです。これは、きちんと歴史に残さなければならないことなんですよね」

氏がそう語ると同時に、私は「これは重要なことだ」という思いで一杯になっていった。父についてももっともっと調べよう。ノーノーボーイについてもっと知りたい。日系アメリカ人の強制収容について調べよう。

2年前の夏の氏との出会いが、私の本当の出発点となったのである。

そして、帰郷するとすぐに、日系アメリカ人の歴史と強制収容についての調査を開始したのである。まず読んだのが、有名な山崎豊子の「二つの祖国」である。この長編小説は、一人の日系アメリカ人2世、天羽賢治を主人公に、日本の真珠湾攻撃から、日系アメリカ人の強制収容、収容所内の日系人達の生活、そして、忠誠登録、対立と反目、天羽のアメリカ軍への志願、日本軍との戦い、戦後の東京裁判における通訳としての仕事、日本人としての苦悩、自殺とこの間の歴史が、丁寧に史実に基づいてかかれていて、歴史入門書としては最適な物であった。

この本によって、だいたいのことが分かるようになると、次にもっともっと専門的な物や証言集や伝記なども読みあさった。そして、また、次の出会いが生まれたのである。1年前の夏である。私の住んでいる三鷹の駅前の自然食レストランで、私の所属する市民運動団体の会合をしているときである。一人の女子大生が、アメリカからの留学生を連れてきていて、紹介したのである。

日系アメリカ人4世である彼は、日本語の勉強のために日本の大学にきて4ヶ月目であった。アメリカの日系人社会では、若者の間で日本語の勉強や、日本の伝統文化に対する関心が高まっているそ

うで、それは、4世というアメリカ社会しか知らない彼ら若い世代になっても、日系人は、「純粋アメリカ人」ではないという社会の現実があるからであるらしかった。日系人は、2流のアメリカ人でしかない。こういう現実については、ずーと昔から聞かされていたことであったが、今も続いていることに少し驚いたが、そんな現実の中で、結局彼らは、自らの存在証明を「日本人であること……ルーツとしての日本人」に求めているということであった。

その話を聞いたところで、わたしが、「父も日系2世だった」ことを伝えると、ラリーと名乗る、この日系4世の若者は、興味深く「それでは、戦争中の収容所にいたでしょう」と聞いてきたのである。

そこで私は、父のことをかいつまんで話した。ラリーは興味深く聞きながら、私が「ツールレイク収容所」というと、真剣な顔になった。

「あなたのお父さんは、ノーノーボーイですね。それで、ツールレイクのことをあなたに話しましたか」 写真家宍戸氏と同じことを聞いたのである。私が、ほとんど話さなかったことを告げると、「今、アメリカの日系人社会では、収容所のことをしっかりと調べて、記録しようという運動が起きているのです。それも、あなたのお父さんのようなノーノーボーイの人たちが収容されていた、ツールレイク収容所のことと、ノーノーボーイの人たちのことが中心なんです」「これは重要なことです。私も、カリフォルニア大学バークレイ校で、その調査研究をしているのです。日本にも、熱心に研究している人たちがいますから、紹介します」

なんということだろう。ラリーは父と同じ大学に学んでいるのだ。そして、日系4世であり、若者である。彼の祖父も収容所に入れられていたようだ。つまり、私がアメリカにいたならば、私の息子の世代である。その彼が、(息子達が)父達のことに関心を持ち始めているのだ。これは、大変なことだ。そして、なぜ、彼ら若い世代が関心を持っているのだろう。

彼は、私に日本の研究者として、横浜市立大学助教授の滝田祥子

さんを紹介してくれた。ここで、また新しい出会いが生まれたのである。

さっそく、私は滝田さんに連絡し、ラリーのことを伝え、お会いしたいと告げた。昨年の秋にお会いした滝田さんは、まだ30代の若い研究者だった。彼女は、8年に及ぶアメリカ留学中に、日系人の強制収容について知り、その中でも、ツールレイク収容所のノーノーボーイの人たちのことに興味を持ち、調べ始めたようだ。私がコピーして持ち込んだ、父の資料を見ながら、「まだ健在な人たちもいるんですよ。でも80代から90代で、時間がないのです。それに、その人達も最近になって、やっとしゃべり始めたのです。お父さんと同郷で、広島に山根さんという94歳の方がいるんですが、私はこの方にいろいろ聞いて、記録しているんです。是非、早い機会に会うといいですよ。それと、私は、ツールレイク・ピルグリメージ（ツールレイク巡礼）という、2年に一度、アメリカの人や日本の人たちで、ツールレイクを訪れて、いろいろな人の話を聞いたり、現地を見学する催しを主催しているのですが、来年の夏にありますから、是非参加しませんか」と話し、父の資料の解読をお願いすると喜んで引き受けてくださった。そして、彼女は、ノーノーボーイ研究の日本の第1人者である、敬愛大学の村川庸子教授を紹介してくれた。また、もう一人の出会いがそこで生まれた。

その秋にお会いした村川教授は、40代後半の研究者らしい落ち着きを持った方だった。私の持ち込んだ父の資料のコピーと、父の話を聞くと、宍戸氏やラリー、滝田さんと同じように、ノーノーボーイの方々が高齢であり、なかなか調査が難しいことや、話してくれない困難さについて話し、父についていくつかの質問をした。研究者らしく、的確にそして、丁寧に質問されたことから、いくつか私の思い違いが分かってきた。

父は私に「戦争が終わると、アメリカ政府が日本に帰るか、残るか聞いてきたので、日本に帰ることを選んだ」と言っていたが、これは、間違い（ウソ）で、「強制送還」されたこと、なぜなら、

父が帰国した時期から見て、第1次送還船で帰国したらしいこと、この船に乗った人たちは、「もっとも悪質（アメリカ政府にとって反米的）な人たちだった」。

「その人達は、ツールレイク収容所で市民権放棄を自らした人たちで、すでにアメリカ市民権を持っていなかった……日本にしか帰れなかった……人たちだった」「それにもかかわらず、父は後にアメリカ市民権回復運動に加わり、市民権を回復したこと」などが分かってきた。

このことは、父が日本では、一度も選挙権を行使しなかったことや、残した資料の中の一部から村川教授が推察したことだった。わずかの時間で、村川教授が父について、私の知らなかったことを調べ上げたことに驚き、しっかり調査する必要があることを痛感したのだった。村川教授とお会いして数週間後に、氏からメールをいただき、やはり、父が第1次送還船に乗っていたことが乗船名簿から分かったことや、その写しを送っていただいた。

その乗船名簿には、MASAO KAWATE と、はっきりと父の名前が書いてあった。この写しを見たときに私は、亡くなった父に再会した気持ちになり、涙が出た。この書類の中に父は生きていたのである。

その書類には、ツールレイク収容所での、父の住所も書いてあった。これがつぎの私の追跡調査にもつながったのである。

宍戸氏、ラリー、滝田さん、村川教授とつながった私の父への追跡調査の糸は、次々へと発展していった。私の勉強もすすみ、（特に村川教授の著作「日米戦争と日系人」（市民権放棄、剥奪、回復をめぐるアイデンティティの摸索）、「日米戦時交換船・戦後送還船「帰国者」に関する基礎的研究」（日系アメリカ人の歴史の視点から）は、大変に優れた研究書で、私に多くのことを教えてくれた。）日系アメリカ人の強制収容についての知識も徐々に増えていったのである。

第1章 父の思い出

——日系アメリカ人2世の父はどういう人だったのか——

私が、日系アメリカ人の強制収容、特にその中でもツールレイク「隔離」収容所に収容された（現在は隔離されたと表現されている）ノーノーボーイと、その中でも、アメリカ市民権を自ら放棄して（現在では、放棄せざるを得ないようにアメリカ政府が追い込んだとして、「剥奪」としている）戦後、日本に強制送還された帰国組の人々について興味を持ったのは、当然のことながら、私の父がその一人であったからであり、父がその意味で「変わった人」であったからである。「変わっていた」とは、子供である私から見ると、友人達の父親とは、もちろんかなり違い、いわゆる「日本の父」ではなかったからである。

私と妹（私は2人兄弟である）の共通した認識では「父はアメリカ人だった」のである。だからこそ、私は父のことを調べたくなったのであるし、そのような父に育てられた私たち兄弟は、当然のこととして、「日本の教育」を受けなかったので、成長するに従って、「自分のどこかが、みんなと違う」という思いに悩まされ続け、日本社会への同化が難しいという性格を持っていたので、なぜ自分はそのようなかを父を調べることによって知りたいと「自分探し」の思いも強くなったのである。

私の父、川手正夫は、大正2年（1913年）アメリカ合衆国カリフォルニア州サクラメントの郊外の農村で祖父、川手小一、祖母みと、との間に長男として生まれた。祖父は広島県佐伯郡五日市（現在は広島市佐伯区五日市中央）の農家の長男として生まれたが、若くして、単身アメリカ合衆国、カリフォルニア州に「農業出稼ぎ労働者」として渡航した。そして、祖母とは、当時一般的であった、「写真